

森鷗外と平出修と幸徳秋水

篠原義彦

教育学部国文学研究室

神崎清は「大逆事件の文学的波紋」と題する座談会で極めて注目すべき発言をしている。「明治四十三年十二月十日から公判がはじめられたのですけれど、そのとき裁判所に森鷗外が官吏の特別傍聴席に来ていた。これは鷗外文獻にはないし、日記にも出てこないんだけど、当時の『毎日電報』いまでいえば『毎日新聞』だな——あの系統の記者で猪股電火というのが、鷗外が来ていたと書いていますね。」というのが鷗外に触れた神崎のことばである。

大審院特別法延での公判は、神崎の証言のとおり明治四十三年十二月十日に初公判が開かれ、翌四十四年一月十八日には判決が宣告された。被告二十六名中二十四名死刑、二名有期懲役という結果であった。その間わずかに四十日間というスピーディーな公判であった。しかも、大逆事件、すなわち、刑法第七十三条に関する被告事件は、「一審ニシテ終審」として大審院が裁判権を有していた。根拠となるのは、裁判所構成法第五十条である。

鷗外森林太郎は、明治四十年十一月十三日陸軍軍医総監に任ぜられ、同時に陸軍省医務局長に補せられている。鷗外が願に依り予備役を仰付けられたのが大正五年四月十三日のこと、従って、鷗外は大逆事件の公判開始の日も、判決言い渡しの日も、そして、その間も現役の軍医総監であり、陸軍省を構成する五局の一つを所掌する医務局長である。鷗外森林太郎と大逆事件は無関係である。陸軍省医務局の所掌する公務と大逆事件は結びつく要素がない。生涯官職にあつてその精励恪勤をもって

知られた鷗外が公の仕事を犠牲にして大審院三階の特別法延に行くはずがない。

しかし、先に挙げた神崎のことばにはどこか心に残るものがある。大逆事件の真実の追求に賭けた神崎清の証言だけに無視しえないものがある。しかも、神崎は根拠を挙げている。「当時の『毎日電報』いまでいえば『毎日新聞』だな——あの系統の記者で猪股電火というのが、鷗外が来ていたと書いていますね。」と。だが残念なのは、猪股なる記者が何に書いているのか判然としないことである。もし、神崎の証言が事実だとすれば、鷗外は何のために、そして、いつ大審院まで出かけねばならなかったのか。法曹関係者でもない鷗外の行動としては奇異であるというはかはない。

十二月十日の初公判の日、鶴丈一郎裁判長は、検事の公訴事実の陳述の直前に、裁判の公開を禁止した。大日本帝国憲法第五十九条には、「裁判ノ對審判決ハ之ヲ公開ス但シ安寧秩序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アルトキハ法律ニ依リ又ハ裁判所ノ決議ヲ以テ對審ノ公開ヲ停ムルコトヲ得」とある。しかし、この傍聴禁止の措置には抜け道があったようで、十二月二十二日付の東京日日新聞は、「傍聴禁止は有名無実」なる記事を掲載し、弁護士や司法省高等官などの傍聴の事実を報じている。裁判所構成法第百六条には、「裁判長ハ公開ヲ停メタルトキモ入延ノ特許ヲ与フルコトヲ至当ト認ムル者ヲ入延セシムルノ權ヲ有ス」とある。

電火こと猪股達也について、「昭和新聞家録」は次のように記して

いる。

長崎県大村藩士の家に生れ青山学院を経て明治四十年日本大学を卒へるや故島村抱月、小川未明両君の紹介で高田日報編輯長の椅子に就いて初めて記者生活に入った。翌年七月上京して毎日電報の社会部に入り、四十三年同社が東京日日に合併されて後も引き続き社会部に勤め大正十二年宿病の神経痛の爲め退社するまでその間大部分を司法記者として送り、大事件突発毎に敏腕を揮つて同僚を畏怖せしめたものである。翌十三年一月末弁護士協会に聘せられて機関誌法曹公論の編輯を主宰して今日に至る。尚ほ大正十二年四月友人と相謀り幼弱児の教養を目的とする筑波学園を創設し、毎年畏きどりより御内帑金を下賜され、翌十三年には司法省より少年保護士を囑託され、東京少年審判所屬として活躍してゐるが、其の功勞に依り昭和三年の御大典に際して奏任待遇に列せられた。明治十九年六月十一日生れで昭和四年五月の杉並町々會議員選挙には推されて候補に立ち、最高点を以つて当選し現に副議長の職に在る。

というのがその骨子である。「名家録」の記すところによれば、司法記者として活躍中の猪股電火の前に現出したのが大逆事件であつたということになる。

神崎清の問題の発言は、瀬沼茂樹との対談の席で行われたものである。神崎は「日本の文学者で、幸徳秋水に事件後接触している人間が三人いるんですよ。一人は弁護士であつたから当然のこととして、平出修(露花)ですね。」としたうえで、前掲の鷗外の特別傍聴席云々の一件に触れ、「三番目」として、慶応へ講義に出る途次での荷風と秋水らを乗せた「檻車」の遭遇を挙げている。幸徳秋水がその自由を拘束されたのは明治四十三年六月一日、四十年余の生涯を刑場の露と果てたのが翌四十四年一月二十四日のことである。神崎の言によれば、大逆事件の首魁と目された秋水に「事件後接触している」日本の文学者は、平出修、森鷗

外、そして、永井荷風の三人である。無論、平出修の場合は高木顯明・崎久保誓一の弁護士として特別法延での接触、また、永井荷風の場合は、通勤途上での接触ということになる。

前掲の「名家録」によれば、電火こと猪股達也は大正十二年宿病のため記者生活を退き、翌十三年一月には弁護士協会の招きに応じて機関誌「法曹公論」の編輯者として再出発している。「法曹公論」は大正十五年一月の改題後の機関誌名であり、改題前の誌名は「日本弁護士会録事」である。大正十三年三月号の同誌には電光石火なる筆名で「反逆者の裁き——幸徳事件の思ひ出——」が掲載されている。「電光石火」とは、電火その人のことであらう。

猪股電火は、虎の門事件の大審院での開延を前にして、「これと相似た幸徳事件の裁判の模様を語るも何かの参考になりはしないかと思ひ、司法記者として該公判に傍聴した当時の光景を、記憶するまゝに語らんとするのみである。」と記したうえで、十二月十日の初公判の日の大審院周辺のものものしい警戒の様子と被告の動静を描き、続いて筆は翌年一月十八日の判決の日と二十四日の死刑執行当日の秋水と執行官のやりとりとに及んでいる。猪股の回顧録の中に次の一文がある。十二月十日午前九時の光景である。

廳がて、右側廊下寄りの扉が開かれたと思ふと、そこから深網笠を冠つた被告がはいつて来た。被告の手には黒鉄の手錠が固くはめられてゐた。そして此日に限つて、看守は特にピストルをつけてゐたが、そのピストルを付けた看守が二人で、一人の被告の両手を両方から自分等の手に組み込ませてゐた。一番先頭の被告は着席する数歩前のところで、網笠を取り除かうとしたが、縛められてゐるその手は、到底網笠に届く筈はなかつた。それを看守が衝と取つてやると、被告はにつつと笑つて廷内を見廻はした——、それは実に本件の巨頭幸徳伝次郎その人であつたのだ。

傍聴人の視線は、期せずして幸徳の上に集つた。疎髯を貯へた顔は、いさゝか宿痾に蒼褪めてゐるが、悪怯れた様子は少しも見せず、二人の看守に両手を組まれたまゝ昂然として着席したが、彼と面識のある私は何ともいひ様のない感慨に打れたのであつた。——いや私許りでない、彼は新聞記者の先輩として、記者席には同僚だつた人は勿論、多くの知己や後輩がゐるのであるから、彼としてもなつかしいものがあるに相違ない。果然、彼は一瞥を記者席にくれたが、その視線はハタと私の視線と出会つた、そしてお互に黙礼を交はしたのであつた。平出修の手になる「遭逢と別離と」を想起せしめる筆致であり、「司法記者として該公判に傍聴した当時の光景を、記憶するまゝに語らんとするのみである。」という前書きの一文における「のみ」の中に込められた「電光石火」なる筆者の心の揺れの背景を物語るものである。

竹盛天雄は「鷗外その紋様 その13」の付記において、「鷗外が大審院特別法廷の傍聴席に姿を見せたという猪股達也の説があるが、なお吟味されるべきであつて、叙述には取り入れなかった。」と記してこの問題に対して慎重な態度を示している。無論、猪股電火が「鷗外が来ていた」と書いた事実が確認され、しかもそれが猪股の誤認でなかったことが立証されない以上、神崎清の言を鵜呑みにすることはできない。しかし、「大逆事件の文学的波紋」の発言は、余人の言にあらずして、神崎の発言である。そこには千鈞の重みさえある。

鷗外の日録、明治四十三年歳晩の条は以下のとおりである。

二十七日（火）。晴。局内職員を偕行社に招きて晩餐を饗す。

二十八日（水）。晴。次官予等を第一会議室に集へて歳晩の挨拶をなす。

二十九日（木）。晴。参内し、次いで東宮御所にまゐる。歳末の礼にゆきし家は陸相、文相、内相、農相なり。縮刷八大伝の序を書きて渡部六尺に遺す。

三十日（金）。晴。亀井伯夫人、小金井良精を訪ふ。賀古鶴所来話す。

馬琴日記鈔の後序を作りて、古郡幸介に遺す。

三十一日（土）。陰。時々雪ふる。戸塚鉄子来訪す。平野甚三久保が大連にて窒扶斯を病めるを報ず。

官衙にある身にとって、いつの世も同じ歳晩風景である。医務局内の歳末晩餐会が偕行社で行われたのが二十七日、続いて、二十八日の御用納め、二十九、三十の両日の「歳末の礼」、そして、「時々雪ふる」大晦日の記述となっている。その間、鷗外は、二つの小文をものしている。すなわち、「縮刷八大伝の序」と「馬琴日記鈔の後序」である。それぞれ、御用納めの翌日及び翌々日のことである。

鷗外が大審院特別法廷の「官吏の特別傍聴席」に「来ていた」のは、明治四十三年十二月二十八日の午後のことではないだろうか。当日の日録の「次官予等を第一会議室に集へて歳晩の挨拶をなす。」という文言からは何もわからぬが知ることはできない。陸軍省第一会議室における陸軍次官の「歳晩の挨拶」で、明治四十三年の公事は終了した。無論、その後の鷗外の動静については語られてはいない。しかし、午前中の「歳晩の挨拶」を聞いた後、官衙を後にした鷗外森林太郎の足が大審院に向つたとしても決して不思議ではない理由がある。鷗外が大審院の特別傍聴席に姿を見せたのは、明治四十三年十二月二十八日、すなわち、御用納めの日のことではなかったか——。この日、午後一時から、平出修の最終弁論が行われることになっていた。御用納めの日も開廷とは異例のことであろう。

東京日日新聞の明治四十三年十二月二十九日付第三面第二段には、「○独米両大使の傍聴△無政府党员公判続行」なる見出しとともに、「幸徳らの無政府党员叛逆事件の第十五回公判は二十八日午前十時開廷し引続き弁護人の弁護に移り尾越半田二氏の弁論を終り正午休憩の午後一時再び開廷平出川島二弁護人の弁論を終り閉廷したるは午後五時三十分

なり次回は廿九日続行し安村、吉田、宮島、磯部、鶴沢五氏の弁論ありて審理終了の都合なり因に同日午前中独及び米国の両大使は各一名の館員を随へ高等官席に在りて弁論人弁論及び各被告等が法廷に於ける態度を見聞したる後正午帰館せるが又以て米独二国が無政府党に対する用意の周到なるを知るべし」と報ぜられている。文中の平出弁論人とは弁護士平出修のこと、修は「明星」「昂」に拠る文人でもあった。鵜外が官吏の特別傍聴席に座ったのは、二十八日の午後のことではなかったか。平出修の弁論を聞くべき必然性が鵜外にはあつたはずである。

公判は二十九日も続行された。三十日付東京日日新聞第三面第一段には、「○審理全く終る△御用納後に十一時間△判決は来る一月中旬」という見出しのもと、「斯くて日を閲する二十日回を重ねる事十六の長に亘りて社会の耳目を聳動したる叛逆被告事件も茲に全く審理を終り閉廷したるは午後八時二十分なり因に判決期日は確定せざるも多分一月中旬なる可しと聞く。閉廷後弁護士控所に於て某々弁護士は語りて曰く由来本件たるや当局迫害の産物たるに外ならざれば係官と雖も此間の消息は既に十分知悉し居り且多年最高司直の府に在る諸氏なれば徒に上司の鼻息を窺ひ為めに裁判の公正を失する事なきは勿論なり」と。なる記事が見られる。末尾に見られる「某々弁護士」については、修の面影がただようが、大津事件の児島惟謙の再現は望むべくもなかった。被告二十六名中二十四名死刑、残る二名が懲役刑、これが明治四十四年一月十八日の判決であつた。

大審院で判決が宣告される八日前、秋水は東京監獄から平出修あてに一通の封緘がきを出している。

先頃は熱心な御弁論感激に堪へませんでした。同志一同に代りて深く御礼申上ます。年末年始の休みで、検閲がなかったため、御手紙は昨日漸く拝見、其為め御返事が遅くなりました。御差入の「酒ほがひ」も昨日其旨達せられましたので、監下げを願つてあります。是又厚く

御礼申上げます。私も文芸の興味が全くないでもありません、十五、六歳から卅歳前迄は、文芸熱に浮かされて、殆ど狂するが如くでした、美神のあこがれは、恋に酔ふのと同じことで、一生さうして居られ、ば幸福ですが、此美しい夢は必ず一度は醒める時があります。今でも私は其時代時代の代表的作家の代表的作物には一通り目を通して時代の思想に後れないやうには努めて居りますが、ドウも昔しほどの興味を持ちません、是れは一つは日本の文学が余りに夢で、余りに別天地で、人生の實際と余りに没交渉なる為めで、若い夢みて居る人は知らず、深く實際生活の有様を味つた四十前後の人に取つては、何だか物足りなく思はれる点があるのではないかと思はれます、で、私の希望する、私の樂しむ、私を感動せしむる文芸は、一たび此美しい夢から醒めて、實際の生活に立返り、深刻に社会の真相を觀破した頭脳から進つた文芸です。思ふに社会主義者の心身を打込む文芸は、是でなければなりません。社会主義者は科学に基づき實際生活から割出すので文芸に縁遠いかのやうに仰せられるのは、違つて居ます。故人ではウキリアム・モリスの如き詩星、ゾラやハウプトマンの如き文豪、現存者ではゴルキー、アナトール・フランス、ダヌンチオ、バーナード・ショーの如き、世界第一流の地歩を占め、其作物が独り夢見る青年のみでなく、深く広く一般社会の人心を震撼するを得る所以の者は、彼ら皆な人生に對し社会に對し、哲學的科学的に組織ある見識を有して、其描く所が文学の夢、別天地の夢でなく、直ちに人間の真に触れ得るが為めと思ひます。そして以上を名を挙げた人人は、皆な自覺せる社会主義者たることは、最も注意して戴きたい所だと思ひます。私は文芸をもつて主義を説き伝道に利せねばならぬといふものではありません。文芸は元より文芸としての真価を有せねばなりません、私の望むのは、其真価を人生と交渉ある点に見出したいのです。人生と没交渉で画に描ける女を見るやうでは、少年は兎に角、大人を動かすに足りま

せん、日本の文学でも鷗外先生の物などは、流石に素養力量がある上に、年も長じ人間と社会とを広く深く知つて居られるので立派なものです。私はイッつも敬服して読んで居ます。トンだ文芸論になつて了ひました。御申越の趣きは、今回事件に関する感想をとのことでしたが、事茲に至つて今將た何をか言はんです。又言はうとしても言うべき自由がないのです。想うに百年の後、誰か私に代つて言つてくれる者があるだらうと考へて居ます。無始の祖先から遺伝した性質と、無辺の宇宙から迫り来た境遇とが打突つて、作り出す人間の運命は、自分の自由にも人の自由にもなるものではありません。唯だ此運命の範圍の中に樂地を求めて安じて居るのみです。紙面がないので是だけ。

(傍線筆者)

秋水の文面を支配する独特の情調の中で、(A)には、自らを「自覚せる社会主義者」として位置づけようとする意志が見られる。「自覚せる社会主義者」、自覚と醒覺に立脚した社会主義者、この秋水が死を覚悟して綴つた平出修あての最後の書簡は、修あての礼状である。冒頭の部分で、秋水は修に対して感謝の意を表している。一つは修の「熱心な御弁論」に対して、二つ目が修が歳晩に出した「手紙」に対して、そして、三つ目が修が差し入れた吉井勇の歌集「酒ほがひ」に対してである。

秋水の「自覚せる社会主義者」なる言挙げは、弁護士平出修の「熱心な御弁論」の中で展開された言辞に対する回答である。修の大審院特別法廷での弁論は、既に触れたように歳晩二十八日の午後行われた。そして、その最終弁論を「官吏の特別傍聴席」に座つて聴いたのが鷗外ではなかったかとするのが筆者の「想定」である。鷗外の日録明治四十三年十二月十四日の条には、「平出修と謝野寛に晩餐を饗す。」とあり、鷗外の末弟潤三郎は、「その頃大逆事件といふ不祥事が起つたが、弁護士にして誰一人社会主義と無政府主義との差別さへ、正確に知つた者が無かつた。昂の同人平出修氏も弁護士の一人であつたが、弁論の始まる前に

その正確な知識を聴きたいと謝野寛氏に相談し、与謝野氏は平出氏を觀潮樓へ伴つてその事を依頼した。兄はかねて歐洲における主義者に関する新旧文献を蒐集し、又新聞雜誌を通して最近の動靜をも明確にしてゐたから、直ぐに代表的文献を書庫から出し、露、伊、独、仏、葡等に於ける両主義者の最近の運動に至るまで教晩に亘つて語つたのが非常に平出氏の参考となり、その弁論には先輩花井卓蔵博士も感心し、被告中教育ある数人をして、『平出氏のあの弁論があつた以上、死んでも遺憾なし』といふて感泣させたさうである。」と記している。

「定本平出修集」の中に、「刑法第七十三条に関する被告事件弁護の手控」なる一文が見られる。十二月二十八日午後から行われた修の弁論がどのようなものであつたかを知ることのできる貴重な資料であり、鷗外の聴覺に響いて來た言辞でもあらう。その「手控」の中に面白い一節がある。

露西亞の様な極端な專制國に起つた革命思想と、英吉利西の様な極端な自由の下に育つた無政府思想とは、全く二者別様の觀がある、又独逸の様に社会政策の実行が着々進歩して行つてゐる國には、如何に無政府主義的思想を呼号しても其呼号する標識を失つてしまふ、而して独逸の皇室は極めて安泰である、皇帝自ら自動車をかりて屢々伯林公園を散歩遊ばす、之は我々の如き日本にばかり居る者よりも、近く二回も洋行して親しく世界各國の本情を見聞して來られた平沼檢事は、よく御承知の筈である、或は、伯林公園内独逸皇帝御散步の御姿は、現に平沼檢事も御覽になつて居るかもしれぬ。(傍線筆者)

「近く二回も洋行して來られた」檢事平沼驥一郎に対する極めてアイロニカルな言辞である。続いて引用するのが秋水自身が自らを「自覚せる社会主義者」として言挙げする源となつた平出修の弁論の一節である。そして、刑法第七十三条に関する被告を死刑宣告から救拔せんとする弁護士平出修の立論の中核をなす部分でもある。

平沼検事は、本件犯罪が無政府主義実行の信念より来たものであると云はれた、之は本件被告が無政府主義者と云ふ一つの信念に結び付いて居ると云ふ仮定から発足した断定である、故にもし本件被告に此信念がないと云ふことになる、此断定は当然其基礎を失ふことになる。然らば本件被告に無政府主義者たるの信念があつたかと云ふに、彼等の大多数は、無政府主義の本体に就いて確たる意見がないのである。現に主義其ものに対する智識がないものに、信念と云ふものがありやう筈がないのである。一体今日の新思想は、個人の自覚と云ふものが基礎をなして居るので、すべて理性の上から判断して自己の帰依する思想を交^こてるのが近代人の特色の二つになつて居る。故に理解なしに信ずると云ふ迷信は、近代思想の最も忌む処、自覚して信じ、理解して実践すると云ふことでなくては、近代思想の信念ではないのである、近代思想が危険であると云はるのも、つまり個人の自覚と云ふ牢^こ平とした基礎の上に立つからである、然るに本件の被告には、未だ此自覚がなく、理解がなく、もし彼等が無政府主義者なりとすれば、理解のない主義者、自覚のない主義者である。故に少し考察して心眼を開くか静思して理解に入るかすれば忽ち懷疑思想に捉はれるのである。之れは多数被告の態度を親しく目睹せられた判官諸公のものはや看取せられた処のものであつて、斯くの如きものを主義者とは申されぬのである。彼等は只社会の欠陥に慨し、所謂燕趙悲歌の士を氣取つたにすぎぬのである。従つて真に主義に殉ずる、確固不拔の意思があるのでは決してない。既に信念がない以上は、之に伴うた行動のあらう筈がないのである。此事は現に本件被告事件の内容が証明し得て明であるが、如何に此事件を被告の不利に見るも、畢竟被告の軽々しい口先のことが主になつて居て、それ丈の計画も決心もなかつたのであることは、検事に於ても充分御見分がつくであらうと思ふ。

大逆事件の被告を、「理解のない主義者、自覚のない主義者」と断じて、

死刑の宣告から免れさせようとする平出修の論旨は鮮やかである。啄木日記の明治四十四年一月三日の条の「平出君と与謝野氏のところへ年始に廻つて、それから社に行つた。平出君の処で無政府主義者の特別裁判に関する内容を聞いた。若し自分が裁判長だつたら、菅野すが、宮下太吉、新村忠雄、古河力作の四人を死刑に、幸徳大石の二人を無期に、内山愚童を不敬罪で五年位に、そしてあとは無罪にすると平出君が言つた。」という記述と照合する時、并護士平出修の絶妙な論旨の展開が胸を打つ。「然るに本件の被告には、未だ此自覚がなく、理解がなく、もし彼等が無政府主義者なりとすれば、理解のない主義者、自覚のない主義者である」という平出修の巧妙なレトリックを判官の前の被告席で聴いていたのが秋水幸徳伝次郎であつたし、また、「官吏の特別傍聴席」で耳を傾けていたのが鷗外森林太郎ではなかつたか。

明治四十三年十二月二十八日、大審院の特別法廷で平出修の并論を聴いた秋水は、その巧みなレトリックに感謝しつつも、あえて自らを「自覚せる社会主義者」の一人として言挙げしなかつたのではないか。既に触れた修あて秋水書簡の(A)、すなわち、「そして以上に名を挙げた人は、皆な自覚せる社会主義者たることは、最も注意して戴きたい所だと思ひます」なる一文には、秋水の一方ならぬ思いがただよっている。そして、秋水の揺れる情感は、「事茲に至つて今將た何をか言はんです。又言はうとしても言うべき自由がないのです。想うに百年の後、誰か私に代つて言つてくれる者があるだらうと考へて居ます」という一文で奥津城を見出すことになる。秋水は百年の後のおのれの墓標を自ら建立して死地に赴くことで安らぎを求めた。

秋水の(A)なる一文は、婉曲ではありながらも自らを「自覚せる社会主義者」として位置づけようとする意志の産物である。そして、この(A)は、秋水が耳にした修の(D)なる文言への回答である。修の投げた(D)というボールを秋水は「非D」という形に持ちかえて修に投

げ返した。「理解のない主義者、自覚のない主義者」という明治四十三年十二月二十八日午後の大審院特別法廷での文言は「自覚せる社会主義者」ということばとなって翌四十四年の一月、修のもとに返って来た。

平出修の(D)なる立論はみごとである。「牢平とした」自覚のない主義者であるという無罪論は極めてセンセーショナルである。そして、この立論の背後には、鷗外森林太郎が存在したのではなかったか。歳晚十四日の鷗外の日録の「平出修与謝野寛に晩餐を饗す。」という簡潔な表現の中に隠されているものの重みを感じざるをえない。

この修の観潮樓訪問をめぐって、修の息平出彬は「父・平出修のこと」において、「事件の弁論にあたつては、近代思想研究のためしばしば碩学の鷗外の門を叩いた。鷗外は文学のみならず、この面でも父の偉大な師であった。しかし父は『森さんのいうことも私の考えとあまり違わなかった』と母に語ったそうだが、この言葉は、単に父の自慢話としてではなく、自分の見解を鷗外に裏付けられて自信をもって勇敢に弁論をした力となったこととして理解すべきであろう。」と記している。教示なのか裏付けなのか、微妙なところであるが、(D)をその中核とする修の弁論の背後には鷗外が見え隠れする。

そして、明治四十三年十二月二十八日の大審院の特別法廷で、(D)のくだりを聴いた人物の中に鷗外自身もいたのではなかったか。御用納めの日の鷗外の日録は黙して語らないものの、「次官予等を第一会議室に集へて歳晚の挨拶をなす。」という一文の後に何かが隠されているのではなからうか。この日、「官吏の特別傍聴席」に軍医総監の軍服を着た鷗外森林太郎の姿を認めた秋水は、十三日後の一月十日付平出修あて書簡で、(B)なる讃辞を呈したのではないか。秋水は自らの文芸遍歴を回顧したうえで、「酒ほがひ」のごとき「美しい夢」に酔う文芸を過去のものとし、「四十前後」の自分を感動せしめる文芸を「一たび此美しい夢から醒めて、実際の生活に立返り、深刻に社会の真相を観破した頭脳

から進つた文芸」であると規定している。この宣告に立つたうえで秋水は、「日本の文学でも鷗外先生の物などは、流石に素養力量がある上に、年も長じ人間と社会とを広く深く知つて居られるので立派なものです。私はイツも敬服して読んで居ます」と記して最大の讃辞を送っている。秋水の文面で挙げられた泰西の文人はウィリアム・モリス以下七名、日本の文人の中ではわずかに鷗外ひとり、しかも最高の讃辞をもって遇せられている。十二月二十八日の大審院の法廷で被告人秋水こと幸徳伝次郎は招呼の間に鷗外森林太郎の姿を見たのかも知れない。

秋水は、「鷗外先生の物」を「イツも敬服して読んで居ます」と記している。この一文は重要である。秋水の記す「鷗外先生の物」とは何なのか。(B)の讃辞の中の「鷗外先生の物」は、「舞姫」や「うたかたの記」でもなければ、「平日」や「キタ・セクスアリス」でもない。現今の作物、すなわち、明治四十三年の秋から歳晚の作物である。

東京監獄の人となった秋水は四十三年の秋ごろからしきりに書籍の差し入れを求めている。十月二十一日には師岡千代子あてに「至急に願いたいのは『仏英英仏対訳字書(カッセル出版の)』の大きなのを送つて貰いたい」と記すとともに、「書籍も許可された」と認めている。また、大審院での初公判の翌日、すなわち、十二月十一日付の堺利彦あて書簡でも、秋水は「雑誌難有う、太陽は矢張不許であつたが、新仏教は無論通過した、是だけでも大分世間に明るくなつた、貝塚君中々味ヂをやり居るワイ、久し振でアノ軽妙な筆致を見て胸のすく心地がした……、新仏教徒の今日の境遇なども略ぼ察せられる」と記して外界への関心を示している。そして、七日後の十二月十八日付の堺あて書簡で幸徳秋水は注目すべき一文を記している。

三田文学はよく気がついたね、僕はアンナ文学がすきだ、又見あたつたら送つてくれ玉へ、幽月も小説すきだから送つて遣てほしいもんだ。東京監獄の係官の前を無事通過して秋水のもとに届けられた「三田文学」

を読んだ秋水の感慨である。「アンナ文学がすぎだ」の「アンナ」が「三田文学」掲載作品を指すことは言うまでもない。

明治四十四年一月十日付平出修あて秋水書簡の(B)の一文、すなわち、「日本の文学でも鷗外先生の物などは、流石に素養力量がある上に、年も長じ人間と社会とを広く深く知つて居られるので立派なものです。私はイツも敬服して読んで居ます」という鷗外に対する讃辞は、東京監獄に差し入れられた「三田文学」に掲載された鷗外の作物を読んだ秋水の感慨である。(B)の讃辞の由つて来るところは(E)にある。そして、秋水が読んで感動した「三田文学」収載の鷗外の作品とは、「フラスチエス」「沈黙の塔」「食堂」あたりであろうとするのが筆者の見解である。「フラスチエス」は明治四十三年九月一日発行の「三田文学」に、「沈黙の塔」は十一月一日発行の同誌に発表され、「食堂」は十二月一日発行の「三田文学」に掲載された作品であり、「実際の生活に立返り、深刻に社会の真相を観破した頭脳から進つた文芸」である。

鷗外が明治四十五年一月一日発行の「中央公論」に発表した思想小説「かのやうに」の中に次のような一節がある。

ドイツは内治の上では、全く宗教を異にしてゐる北と南を擣きくめて、人心の帰嚮を繰つて行かなくてはならないし、外交の上でも、いかに勢力を失墜してゐるとは云へ、まだ深い根柢を持つてゐるロオマ法王を計算の外に置くことは出来ない。それだからドイツの政治は、旧教の南ドイツを逆はないやうに抑へてゐて、北ドイツの新教の精神上、文化の進歩を謀つて行かなくてはならない。それには君主が宗教上の、しつかりした基礎を持つてゐなくてはならない。その基礎が新教神学に置いてある。その新教神学を現に代表してゐる学者はハルナツクである。さう云ふ意味のある地位に置かれたハルナツクが、少しでも政治の都合の好いやうに、神学上の意見を曲げてゐるか云ふに、そんな事はしてゐない。君主もそんな事をさせようとはしてゐない。

そこにドイツの強みがある。それでドイツは世界に羽をのして息張つてゐることが出来る。それで今のやうな、社会民政党の跋扈してゐる時代になつても、キルヘルム第二世は護衛兵も連れずに、侍従武官と自動車に相乗をして、ぶつぶと喇叭を吹かせてベルリン中を駈け歩いて、出し抜に展覧会を見物しに行つたり、店へ買物をしに行つたりすることが出来るのである。ロシアとでも比べて見るが好い。グレシア正教の寺院を沈滞の儘に委せて、上辺を真綿にくるむやうにして、そつとして置いて、黔首を愚にするとでも云ひたい政治をしてゐる。その愚にせられた黔首が少しでも目を醒ますと、極端な無政府主義者になる。だからツアアルは平服を着た警察官が垣を結つたやうに立つてゐる間ではなくては歩かれないのである。(傍線筆者)

五条子爵の嗣子秀麿のベルリン留学中の嘔目の景であるが、どこかで聞いたことのある科白でもある。あの平出修の「刑法第七十三条に関する被告事件弁護の手控」の中の(C)の部分、すなわち、「皇帝自ら自働車をかりて屢々柏林公園を散歩遊ばす、之は我々の如き日本にばかり居る者よりも、近く二回も洋行して親しく世界各国の本情を見聞して来られた平沼検事は、よく御承知の筈である、或は、柏林公園内皇帝御散歩の御姿は、現に平沼検事も御覧になつて居るかもしれぬ」なる一文と契合する。思うに鷗外が明治四十五年の歳旦「中央公論」に発表した「かのやうに」の中の(F)なる記述は、鷗外の「種明かし」ではなかったか。独逸皇帝の自動車での巡遊の話を観潮楼で平出修に語つて聞かせた鷗外は、大審院の「官吏の特別傍聴席」で修のことばとして聞いた、そして、一年有余の後、「かのやうに」の中で描いてみせたという絵柄が存在するのではなからうか。

鷗外は大正三年一月一日、「中央公論」に歴史小説「大塩平八郎」を発表するとともに、同日付で「大塩平八郎(附録)」を「三田文学」に載せている。明治四十二年七月一日「昇」に「キタ・セクスアリス」を

発表するとともに、一方で、雑誌「東亜之光」の七月号に「当流比較言語学」を発表した手法と軌を一にする絶妙なやり口であるが、歴史小説「大塩平八郎」について中村屋湖は「文章世界」の三月号に「森鷗外氏の『大塩平八郎』(中央公論)は歴史物とは言ひながら、作者が最近の幸徳事件を頭に置いて書いたらしい所に、私一個の興味があつた。現代の生活に暗示を与へるやうな書き振りと、或事件を繞つてをる種々の性格、或事件の為に犠牲を出したり犠牲になつたりする人々の細かい心持も、簡単ながらよく窺はれた。」と記している。コンタンポラン中村屋湖の「大塩平八郎」評の中の「最近の幸徳事件」とは無論大逆事件のことである。

鷗外の手になる「大塩平八郎(附録)」の中に次のくだりがある。鷗外自身が天保八年二月十九日の大塩平八郎の乱を総括した部分である。

平八郎は天保七年に米価の騰貴した最中に陰謀を企てて、八年二月に事を挙げた。貧民の身方になつて、官吏と富豪とに反抗したのである。さうして見れば、此事件は社会問題と関係してゐる。勿論社会問題と云ふ名は、西洋の十八世紀末に、工業に機関を使用するやうになり、大工場が起つてから、企業者と労働者との間に生じたものではあるが、其萌芽はどこの国にも昔からある。貧富の差から生ずる衝突は皆それである。

若し平八郎が、人に貴賤貧富の別のあるのは自然の結果だから、成行の儘に放任するが好いと、個人主義的に考へたら、暴動は起さなかつたらう。

若し平八郎が、国家なり、自治団体なりにたよつて、当時の秩序を維持してゐながら、救済の方法を講ずることが出来たら、彼は一種の社会政策を立てただらう。幕府のために謀ることは、平八郎風情には不可能でも、まだ徳川氏の手へ歸せぬ前から、自治団体として幾分の発展を遂げてゐた大阪に、平八郎の手腕を揮はせる余地があつたら、

暴動は起らなかつたらう。

この二つの道が塞がつてゐたので、平八郎は当時の秩序を破壊して望を達せようとした。平八郎の思想は未だ醒覚せざる社会主義である。未だ醒覚せざる社会主義は、独り平八郎が懷抱してゐたばかりではない。天保より前に、天明の飢饉と云ふのがあつた。天明七年には江戸で白米が一兩に付一斗二升、小売百文に付三合五勺になつた。此年の五月十二日に大阪で米屋こはしと云ふことが始まつた。貧民が群をなして米店を破壊したのである。同月二十日には江戸でも米屋こはしがつつた。赤坂から端緒を發して、破壊せられた米商富人の家が千七百戸に及んだ。次いで天保の飢饉になつても、天保七年五月十二日に大阪の貧民が米屋と富豪とを襲撃し、同月十八日には江戸の貧民も同じ暴動をした。此等の貧民の頭の中には皆未だ醒覚せざる社会主義があつたのである。彼等は食ふべき米を得ることが出来ない。そして富豪と米商とが其資本を運転して、買占其他の策を施し、貧民の膏血を涸らして自ら肥えるのを見てゐる。彼等はこれに処するにどう云ふ方法を以てして好いか知らない。彼等は未だ醒覚してゐない。唯盲目な暴力を以て富豪と米商とに反抗するのである。

平八郎は極言すれば米屋こはしの雄である。天明に於いても、天保に於いても、米屋こはしは大阪から始まつた。平八郎が大阪の人であるのは、決して偶然ではない。

平八郎は哲学者である。併しその良知の哲学からは、頼もしい社会政策も生れず、恐ろしい社会主義も出なかつたのである。(傍線筆者)
「大阪の人」平八郎が乱を起したのは天保年間のこと、鷗外が「大塩平八郎」を発表したのは七十七年後の大正三年のこと、そして、四年後の大正七年八月三日富山県中新川郡西水橋町に端を發した米騒動は、八月十二日神戸の鈴木商店の焼打ち事件にまで及んだ。神戸は大阪とへだたることわずかに三十有余キロ、八月十三日付の東京日日新聞には、「神

戸の大動乱 鈴木商店焼打」「神戸は火の海」「京都市民軍隊と衝突す」「大阪の暴動全市に漲る」の見出しが見られる。因みに八月十八日の鷗外の「委蛇録」には、「開常磐全十古稀庵。予独先往。与老公、貞子、後藤外相午餐。為公読民人尺牘。老公談穀政之事。」とある。文中「老公」とは古稀庵の主山県有朋のこと、「穀政之事」とは、米騒動を中心とする米価騰貴の問題であろう。

鷗外は天保年間の騒乱を「起さなかつたらう」と「起らなかつたらう」の両面から分析したうえで平八郎の思想は「未だ醒覚せざる社会主義」であると極付けている。引用文中、「未だ醒覚せざる社会主義」が三回、「未だ醒覚してゐない」が一回用いられている。鷗外はこの総括に得意満面である。そして、中村星湖の指摘のとおり、平八郎の背後に秋水の姿が見え隠れしている。

「大塩平八郎(附録)」中の(G)なる総括の一文、すなわち、「平八郎の思想は未だ醒覚せざる社会主義である」と、あの「刑法第七十三条に関する被告事件弁護の手控」の中の(D)なる総括、すなわち、「然るに本件の被告には、未だ此自覚がなく、理解がなく、もし彼等が無政府主義者なりとすれば、理解のない主義者、自覚のない主義者である」との問には寸分のずれもない。(G)は(D)なる総括が観潮楼の主鷗外森林太郎によってなされたことの証左でもあり、鷗外自身の「種明かし」でもある。

大正二年九月の「太陽」に平出修は小説「逆徒」を発表したが直ちに発売禁止になった。「逆徒」の末尾を「俺は判決の威信を蔑視した第一の人である。」⁹⁾で結んだ修が宿病のため鎌倉に転居したのは十二月のこと、「昂」終刊号(大正二年十二月一日発行)の「病床より」には、「筆記をして貰つて居てさへもう疲れた。氣力が尽きた。来月以後は、君に創作又は消息の孰れかをもささげる事が出来ないかも知れない。動けるやうになつたら、大磯へでも行つて、二三ヶ月間世の中を忘れやうと思

ふ。もしそれでも書く事が出来れば、万造寺君が来月からやる『我等』の紙面を借りて発表しよう、さようなら」と記されている。「大塩平八郎(附録)」の脱稿は十二月十一日のこと、鷗外の日録大正二年十二月十一日の条には「小論文大塩平八郎を書き畢る。」とある。「大塩平八郎(附録)」における鷗外の種明かしの背景には、「逆徒」の発売禁止と修の露命のことが影を落としていたのかも知れない。

弁護士平出修の最終弁論が行われたのは明治四十三年十二月二十八日のこと、そして、翌二十九日の日録には、「参内し、次いで東宮御所にまゐる。歳末の礼にゆきし家は陸相、文相、内相、農相なり。縮刷八犬伝の序を書きて渡部六尺に遺す。」とあり、続く三十日の条には、「亀井伯夫人、小金井良精を訪ふ。賀古鶴所来話す。馬琴日記鈔の後序を作りて、古郡幸介に遺す。」とある。前者、すなわち、「縮刷八犬伝の序」は正確には「南総里見八犬伝序」と題して翌四十四年四月七日国文館発行の「南総里見八犬伝」第四分冊に載せられた。また、後者は四十四年二月十五日文会堂書店刊行の「馬琴日記鈔」に「馬琴日記鈔の後に書く」と題して収められた。

聖書に似た形の八犬伝が出たと人の噂に聞いた。そして僕は思った。それは形が似て居るだけではあるまい。八犬伝は今世を救ひ人を度する書として新に印刷せられてゐるのである。丁度聖書に似た使命を帯びて世に出てゐるのである。これ程の書を作つた馬琴は貴むべき人である。然るに馬琴が生きて居た時、当時學術最高の府であつた聖堂の儒者は、八犬伝を見損つて風俗を壊乱する書だと思つた。そして当時文教を掌つてゐた林家に稟して、絶板にしようとした。幸にも書肆が人に頼んで林家に愁訴して、八犬伝は厄に遭はずに済んだのである。その証拠は、馬琴の日記天保十四年七月二十七日の条に、かう書いてある。「丁字屋平兵衛来る。(中略)八犬伝の事、聖堂附儒者より林家へ申立絶板になるべき由、ある人被告候者三人有之、種々心配致、

ある人を以て林家へ内々申入、漸く無異に可納由被告之云々。」この記事に誤解すべき余地は無い。今の世には馬琴の貴むべきことが知られてゐる。聖堂の儒者の陋とすべきことが知られてゐる。そして八犬伝は風教を維持する書として世に出てゐるのである。馬琴たるもの限して好からう。

というのが、「南総里見八犬伝序」の全文である。聖書に似た形の八犬伝が単に外形的な近似性のみにとどまらず、「聖書に似た」使命を課せられて世に出ていることに對しての鷗外の感懐である。

「南総里見八犬伝」の序文としての枷を守りつつも、鷗外は時流によつて毀譽を異にする状況を暗に皮肉っている。かつて「聖堂の儒者」が風俗を壊乱する書物であると考えた「南総里見八犬伝」が六十有余年の後、「世を救ひ人を度する」書として喧伝せられてゐる絵柄の中に、鷗外森林太郎は大審院特別法廷の被告席で見た幸徳秋水の姿を思い浮べていたのではなかつたか。「南総里見八犬伝序」の筆致は、明治四十二年七月二十八日「聖堂の儒者」たる文部大臣小松原英太郎の名により「昂」第七号を發禁処分せられた体験を有する鷗外ならではのものであるとともに、二か月前の「三田文学」に發表した「沈黙の塔」で展開した学問觀・芸術觀を想起させるものである。鷗外は「沈黙の塔」において、パアシイ族に場を借りて、「芸術の認める価値は、因襲を破る処にある。因襲の圈内にうろついてゐる作は凡作である。因襲の目で芸術を見れば、あらゆる芸術が危険に見える。」と断じていた。「南総里見八犬伝」が「風教を維持する書」として高らかに喧伝される明治四十三年歲晚の政治的狀況の中に、鷗外森林太郎は「鴉のうたげ」を見ていたのではなかつたか。「パアシイ族の血腥き争闘」を眼前に見た鷗外の感懐が「南総里見八犬伝序」を支配しているのではなかつたか。明治四十三年十一月一日「三田文学」に發表された「沈黙の塔」は、「マラバア・ヒルの沈黙の塔」の上で、鴉のうたげが酣である。」なる一文で結ばれてゐる。

「南総里見八犬伝序」で鷗外が描いてみせた絵柄は、「馬琴日記鈔の後」に書く」においてより鮮明なものとなる。

明治四十三年十二月の事である。僅か一週間を出でないのに、馬琴の事に就いて二箇条の依頼を受けた。一は八犬伝の序を書けといふことで、一は此日記鈔の総評を書けといふことである。

僕が文芸にたづさはるやうになつてから、もう二十年になる。然るに馬琴の事に關する依頼を受けたことは、これまで一度もなかつた。これは偶然ではない。

馬琴は三十年前に再び葬られて、此頃再び生れた。僕の文芸生活の過去は、馬琴の埋没せられてゐた間に経過したのである。

馬琴を再び葬つた小説神髓は、恥かしい書だと、坪内君が僕に言はれた。あれは坪内君の恥ぢなくても好い書だと思ふ。なぜといふに、あれはあの時出なくてはならなかつた書だからである。

馬琴の小説は再び葬られなくてはならない運命を有してゐた。あの幅の広い、そして粗い作風が一度抑へられなくては、奥行の深い、そして細かい作風が新に興ることが出来なかつた。だから坪内君が葬らなかつたら、外の人が葬つただらう。

併し馬琴の小説は葬られ切りに葬られてゐるやうなものではない。欧羅巴でスコットやなんぞの作が永久に読まれる丈は永久に読まれるだらう。

此意味に於いて、僕は永遠なる性命が馬琴の小説にあると信ずる。

これに反して、僕は此頃の馬琴熱を見て、却つて馬琴の爲めに氣の毒な事だと思ふ。なぜといふに、若し此熱が持続して行くと、馬琴は又三たび葬られなくてはならないかも知れないからである。

馬琴熱は目下孔子熱、尊徳熱、赤穂義士熱と共に流行してゐる反応症である。孔子は永久に尊敬すべきである。尊徳は永久に尊敬すべきである。赤穂義士は永久に尊敬すべきである。併し孔子熱も、尊徳熱

も、赤穂義士熱も、馬琴熱と共に一時の流行たるに過ぎない。

文化には奈何なる障礙をも凌いで発展して行く底力がある。子供が麻疹を凌ぎ、疱瘡を凌いで育つて行くやうに、人類はどうにかして、あらゆる疫病に対する免疫血清を醸成して、屈せず撓まず、文化の大道を歩んで行く。

馬琴の神輿をかついで行く祭の人々よ。僕は君達に勧告する。余りに早く凱歌を奏し給ふな。

神輿の中なる馬琴よ。少しの眩暈を辛抱するが好い。かつがれても揺られても、君の真価は動かない。君の永遠なる生命は依然としてゐる。

馬琴よ。僕は君の八大伝の序文を書かせられて、昔愛読した書の二三頁を翻して見た。そして偶然君の并疏の語を発見した。それは大江は論外として、犬塚でも何でも、皆若い癖に老人じみてゐるといふ非難を聞いて、君が「薄衣は八歳にして舜の師たり。皇子は五歳にして禹を佐く」云々と云つてゐる処であつた。君は幸福であつた。先王だのなんのと、一般に認められてゐる權威のある世に生れて、その權威の下に自己を保護することが出来た。君は明治四十何年に生れないで、幸福であつた。

馬琴よ、僕は君の日記鈔の跋文を書かせられて、此鈔本を一読した。君の時代も存外物騒であつた。為永春水は手鎖になつた。君の八大伝もあぶなく絶板になる処を助かつた。風教の維持者として神輿にかつがれる時も来る君であるのに。

馬琴よ。兎に角君は安んじて好からう。君の真価は動かない。君の永遠なる生命は依然としてゐる。

鷗外は現今の馬琴熱を「孔子熱、尊徳熱、赤穂義士熱」の同類としたうえで、「一時の流行」たるに過ぎないと断じてゐる。

歳晚二十九日にもした「南総里見八大伝序」が序文としての責めを

どうにか果たしてゐたのに対して、翌日三十日に記された「馬琴日記鈔の後に書く」なる作物は、後序としての枷をはるかに越えて、放埒である。馬琴という神輿をかついで「鴉のうたげ」に狂弄する明治四十三年歳晚の「反応症」に対して、鷗外は警鐘を鳴らしている。「君は明治四十何年に生れないで、幸福であつた」の「生れないで」は「生きていないで」と同義語であらう。

鷗外は、馬琴の神輿をかついで濶歩する「祭」好きの人々に対して勧告している。「性急に凱歌を奏し給ふな」と。

「ル・パルナス・アンビュラン」Le Parnasse ambulant は、自然主義に対する鷗外の痛烈なアイロニーの込められた作品である。「ル・パルナス・アンビュラン」は六か月前の明治四十三年六月一日発行の「中央公論」に発表された。「最も喜ばしいのは、亡くなつたと思つた先生が棺の中で蘇生して暴れ出されたのを、一同が助け出した事である。文壇万歳万々歳⁹⁾」なる一文は、「杯」や「不思議な鏡」と同様に、文壇の「反応症」に対する痛烈な皮肉である。その意味において、「馬琴日記鈔の後に書く」は、「ル・パルナス・アンビュラン」と同根の作物であり、ともに「祭」好きの人々に対する鷗外の鉄槌でもある。

「君の時代も存外物騒であつた」の「も」には、鷗外の余情がこめられている。「私の時代も」という語を引き出すことはいとも容易である。「あの幅の広い、そして粗い作風」というのが鷗外の馬琴評価の基本姿勢である。その馬琴は「三十年前に再び葬られ」て、今蘇生している。幅の広い、粗い作風としての「性命」に変化はない。ただ変るのは時流であり流行である。馬琴を神輿として、Le Parnasse ambulant を作る人々の愚かさを描くことによって鷗外森林太郎は、明治四十三年歳晚の政治的状況を痛烈に批判したかったのではなかったか。西学東漸の門としての面目躍如たるものがある。

「馬琴の神輿をかついで行く祭の人々よ。僕は君達に勧告する。余り

条に関する被告事件、すなわち、大逆事件をめぐる謎は深い——。

注

- (1) 「日本の名著 44 幸徳秋水」(昭和四十五年、中央公論社) 附録五頁
- (2) 昭和五年十二月二十五日、新聞研究所編・発行、明治新聞雑誌文庫蔵
- (3) 第二十八巻第三号(二九三号) 九二、九三頁
- (4) 「国文学」第二十五巻第六号、後に「鷗外その紋様」(小沢書店)に収録
- (5) 「鷗外全集」(昭和四十六年、五十一年、岩波書店) ⑤—五〇七
- (6) 「定本平出修集」(春秋社) ①—三八八、「幸徳秋水全集」(明治文献) ⑨—五五八
- (7) 「鷗外森林太郎」(森北書店) 一九九頁
- (8) 「定本平出修集」①—三三〇
- (9) 「石川啄木全集」(筑摩書房) ⑥—一八五
- (10) 「定本平出修集」②—六〇三
- (11) 篠原義彦「森鷗外の世界」(桜楓社) 二二三頁
- (12) 「鷗外全集」⑩—五〇
- (13) 「鷗外全集」⑪—七二
- (14) 「定本平出修集」①—三二六
- (15) 「鷗外全集」⑧—二四〇
- (16) 「鷗外全集」⑦—三九一
- (17) 「鷗外全集」⑧—二四一
- (18) 「鷗外全集」⑦—三一

(昭和六十三年九月二十八日受理)
(昭和六十三年十二月二十七日発行)

に早く凱歌を奏し給ふな。神輿の中なる馬琴よ。少しの眩暈を辛抱するが好い。かつがれても揺られても、君の真価は動かない。君の永遠なる性命は依然としてゐる。」——鷗外にしては珍らしく情感のこもった筆致である。馬琴なる人物は、孔子、尊徳、赤穂義士と並んで、「鴉のうたげ」のシンボルである。しかし、それと同時に、かつて人々によって「再び」葬られた人物でもある。「馬琴日記鈔の後に書く」の中の「神輿」なる語の同義語を「ル・パルナス・アンビュラン」に捜すとすれば、「棺」ということになる。右の一文の「馬琴」は一時の流行である「反応症」が探し出した偶像の意味を有するとともに、一方、「血腥き争闘」で葬り去られる犠牲の意を内包しているのではなからうか。鷗外森林太郎が萩野由之の依頼により明治四十三年十二月三十日にもなった「馬琴日記鈔の後に書く」は「後序」の範囲をはるかに逸脱している。馬琴の背後に法廷で目にした秋水の姿が揺曳しているのではなからうか。電火こと猪股達也は大正が終り昭和に入ってもなかなかの健筆である。その奥付に発行所「日本弁護士協会」、編輯兼発行人「東京府豊多摩郡杉並町阿佐ヶ谷八〇一番地 猪股達也」と記された「法曹公論」第三十四巻第七号(昭和五年七月一日発行)には、「誰の罪」なる電火の一文がある。「陪審制度の目的は、前述の様に人権擁護にあつて、一人の冤罪者を出さないにあるのだ、これを制度そのものの罪にするのは考物だ、次ぎは其局に当るもの、労力問題だが、人間料理をさう容易く考へられては困る、如何に手数や労力がかゝつても、一点動すことの出来ない審理を遂げるのが陪審制度の精神だ。此事を耳にしたら、彼の大逆事件からヒントを得て、人権を確立するには陪審制度の設置に然かずと為し、老軀を提げて起ち、在ゆる反対と妨害と抗争し、遂に其目的を貫徹した地下に眠る法曹界の熱血児江木冷灰博士は切齒扼腕するであらう。——陪審制度の不評を招くに至つたのは果して誰の罪?」と記す猪股達也もまた大逆事件の影を引き摺って生きていたのであらうか。刑法第七十三

